

Iida, K. A controversial idea as a cultural resource: The Lysenko controversy and discussions of genetics as a 'democratic' science in postwar Japan. Social Studies of Science 45 (2015): 546-569.

(要旨和訳)

ソ連の農学者トロフィム・ルイセンコの学説に対する議論が日本で始まったのは、戦後の米占領下の時代であった。終戦後まもなく、日本の左派が戦後科学者運動の一環としてルイセンコの学説を紹介した。米国の遺伝学者の多くはこの学説を厳しく批判していたが、当初、日本の遺伝学者は、賛否どちらかの立場をとることなくこの議論に参加した。というのも、遺伝における細胞質と環境の役割について科学的興味があったため、この学説に対し当初は共感的と言える立場をとっていたのである。しかし、冷戦によって東西の分断が深まってくると、日本の科学者も、米国の科学者に倣って、ルイセンコの学説を厳しく批判し始める。興味深いことに、この期間全体を通じて〔冷戦が始まる前も後も〕この議論において日本の遺伝学者が目指していた目標はほぼ変化していない。それは、遺伝学分野を効率よく再建し、適切なイメージと権威を維持することだった。その一方で、彼らの学説への反応がシフトした理由は、政治社会的な背景のシフトにある。特に、〔目指すべきとされた〕「民主的科学」の意味が、“民主的プロセスを採用する科学”から“自由民主国家の科学”へと変化したことが挙げられる。ルイセンコの説を文化的資源 (cultural resource) とみなす分析的視点は、その学説の扱われ方が場所によってどのように異なり、またなぜ異なるのか、さらに、論争が状況により生じたり生じなかったりするのとはなぜか、ということの説明することに役立つであろう。